



Title	シェイクスピア悲劇の世界-序論-
Author(s)	羽根田, 俊治
Citation	明治大学教養論集, 127: 1-25
URL	http://hdl.handle.net/10291/8817
Rights	
Issue Date	1979-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

シェイクスピア悲劇の世界

—序 論—

羽根田 俊 治

〔1〕

シェイクスピアが書いた戯曲37篇のうち36篇を収め、シェイクスピアの戯曲全集としては世界最高といわれ、現在世界に完本のかたちでは42冊しか残っていないファースト・フォーリオ(the First Folio)は、彼の死後7年たってから、仲間の役者であり友人でもあった John Heminge と Henry Condell の二人によって1623年に完成されたものですが、この二人がシェイクスピアの作品を出版しようとした動機は近頃物故した同僚への尊敬と賞讃の念からであったにちがいません。劇場時代のシェイクスピアのこの二人の友人に対してこれまで批評家はかならずしも惜しめない讃辞を呈してはきませんでした。彼らの編集上の仕事は上出来とはいえないにしても、もしもファースト・フォーリオがなかったらシェイクスピアの作品のほとんど半数ちかくは失われてしまっていたであろうと想像されております。「ペリクリース」(*Pericles*)だけがこの全集には載っていませんが、二人はこの作品はシェイクスピアのものとは考えなかったか、あるいは、テキストがひどすぎたのか、そのいずれかの理由によるものと思われる。このようにシェイクスピアの戯曲作品が彼自身が属していた劇団の仲間たちによって保存されたということは、彼の作家としての成熟の世界が劇場であったことを考え合わせますと、たいへん興味あることに思われます。

シェイクスピアはストラットフォード・オン・エイヴォン(Stratford-on-Avon)という中世の頃から名前を出ている古い町に生れ、消息のわからない数年をおいて、おそらく1584年頃にはロンドンにやって来て、役者——といっても端役であったであろうが——をしているうちに筆の方が立つから書いてみないかということで戯曲を書き始め、たいへんな稽古を積んで、1592年にはすでに新進劇作家としてロンドンで名声をあげておりました。当時のロンドン劇壇でも一時おおいに人気のあった脚本を書いていた先輩作家 Robert Greene (560-92) という人が遺言状を残しておりまして、その中で、この頃孔雀の羽根を尻尾につけて威張っているカラスがいるが、あれは「成り上り者のカラス」(upstart crow) であって、自分ひとり偉ぶって自分が現われれば世の中を聳動させることができるとうぬばれ、自分を「当り屋」(Shake-scene) だと気取っている。ああいう男のをさばらしておいては University Wits と呼ばれる、ケンブリッジやオクスフォードなどの大学を出た劇作家の名が廃れるといわんばかりに、シェイクスピアを目の仇にしている。また、シェイクスピア初期の作品「ヘンリー六世」(*Henry VI*) 第三部の中の一行為パロディ風に引用したりして明らかに当時の新進作家シェイクスピアを指して、ああいう者は警戒せよと書いてあることなどから、この頃すでにシェイクスピアは、当時の劇作家たちとは異った低い階級から出て、とうとうロンドンの劇壇を席捲してしまうほどの名声を確立していたことがわかります。そして1594年には当時一流の宮内大臣お抱えの一座 (Lord Chamberlain's Men)——ジェームズ一世即位後は King's Men となる——の座付作者として芝居を書き、役者 (あまりはなばなくない) をやり、また、一座の株主のひとりとして劇団の経営にも参加いたしました。一座は1613年6月29日に「ヘンリー八世」(*Henry VIII*) の初演中に焼失した the Globe Theatre を本拠としましたので、シェイクスピアの芝居の多くはその劇場で上演されました。この約20年のあいだ、仲間たちとの親密さのなかで、また、仲間たちの才能とその限界をよくわきまえ、Richard Burbage のために悲劇役を、William Kemp のためには喜劇役を、また Robert Armin には後期のより陰影をたたえた喜劇役を、それぞれあてた作品を書いていきました。そ

して、彼の想像力は英国の歴史の世界、ローマの世界、*Hamlet, Macbeth, King Lear* などの見知らぬ地域の世界や、多くの空想の世界にその翼をひろげて行きましたが、絶えず彼の念頭にあったのは、劇場という世界のなかの芝居のことであり、役者のことであつたろうと思われまゝ。人生を芝居にたとえたり、登場人物に芝居の演技について語らせたり、声変りのした女役少年役者のために言いわけのせりふを書き添えたり、シェイクスピアの芝居に寄せていた愛着が、いかに深く、変らないものであつたかを証する例は引用にこと欠きません。しかし、また一方では、せりふを忘れて、演技のまづい役者に対しては、かなり手きびしい態度をとつていたやうであります。

Like a dull actor now,
I have forgot my part, and I am out,
Even to a full disgrace.

—*Coriolanus* 5. 3. 40~42.

これでは間抜けな役者よろしく、
せりふを忘れて立往生、
大恥をかきそうだ。

また、ユリシーズの有名な「位階」(Degree)の論を展開する演説のなかで、アガメムノン王にアキリーズのことを、

Thy topless deputation he puts on
And, like a strutting player, whose conceit
Lies in his hamstring, and doth think it rich
To hear the wooden dialogue and sound
'Twi'xt his stretch'd footing and scaffoldage,—
Such to-be-pitied and o'er-wrested seeming

He acts thy greatness in :—and when he speaks,
'Tis like a chime a-mending ;

—*Troilus and Cressida* 1. 3. 152~159.

指揮官たる閣下の物真似と申しまして、
大根役者が丈夫な足の筋肉に物を言わせて舞台をのさばり歩き、
ふまれた板がせりふ代りにいたましい音を立てると、
それを名調子と思いこみ、
みずから聞きほれる時のみっともない情けない身振りで
閣下を演じます。しかもその声は、
さながらひびの入った鐘の音。

とって作者の意図の陰影（あや）を解さない役者にたとえたりしております。

Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more ;

—*Macbeth* 5. 5. 24~26.

人生は歩いている影にすぎない。それともつたない役者、
自分の持ち時間を舞台の上でどたばたやって、
そしてあとは誰一人知るものもない。

役者の芸のつたなさにいらいらした時もあったであります； 同じ人間として、職業を同じくする仲間としての役者たちには優しい心情を寄せていたことは疑いのないことであると思われます。そのもっとも感動的な言葉は、ハムレットがポーニアスに向って、旅役者たちの世話を頼んで語るせりふであります。

Good my lord, will you see the players well
bestowed? Do you hear, let them be well used; for
they are the abstracts and brief chronicles of the time:

——*Hamlet* 2. 2. 526~528.

ではポーニアスどの、お手数ながら役者たちの世話、万事お頼み申す。
よいか、くれぐれも大事にしてやってくれ。役者は時代の縮図、手取り早い
年代記だからな。

こうして劇団の仲間たちにかこまれて人生の最も充実した20年間を過し、37
篇の戯曲と浪漫的物語詩2篇、それに「ソネット集」(*the Sonnets*)全154篇
などの作品を書き、おそくも1611年までには故郷ストラットフォードに引退し
てしまいました。その作品歴から考えても充実した生涯をロンドン劇壇で送っ
たシェイクスピアはどんな人間であったのでしょうか。シェイクスピアの場合
は、骨までというわけにはいきませんが、後世の研究家によって彼の伝記、逸
話、ゴシップの類は詳細に調べ上げられているが、絶対確実だという資料にも
とづいての伝記的記述ということになると、どう考えても、その分量は乏しい
といわざるを得ません。だが、これはあくまでも比較の上のことではありますが。
とくに、1582年も押しつまった11月の末か、12月頃、8歳年上の Anne
Hathaway と結婚し、女の子と双児の男女の子が生まれるまでの、1585年から
1592年、新進劇作家として押しも押されぬ不動の地位を確立した21歳から28歳
までがさっぱりわかっておりません。そこからいろいろとあまり当てにならない
、いわゆる伝説がこの空白期間をみたしていることは周知のとおりでありま
す。そのなかで、Sir Ifor Evans は——これも、いろいろ有名人の逸話を集め
た「小伝集」(*Aubrey's Brief Lives*, ed. Oliver Lawson Dick, 1949) の
著者 John Aubrey (1627-96) によっているのですが——興味ある仮説をたて
ております。それはシェイクスピアがこの時期学校の教師をしていたというの
であります。シェイクスピアは、当時のライバル Ben Jonson の「ラテン語

はほとんどだめ、ギリシア語はなおさら」‘small Latin and less Greek’ というシェイクスピア評が長く残って、無学同様といわれてきましたが、近來の考証研究で、ラテン語や修辭学の学習などを含めて、彼が受けたグラマー・スクールの教育はかなり高かったという評価を考え合わせますと、この仮説もあたっているような気がいたします。人柄につきましても‘gentle Shakespeare’ と同時代の人に呼ばれているから、おだやかな人物であったと想像されます。人物評の最初のは1592年、シェイクスピアをさんざんこきおろした雑録を編集した Henry Chettle がシェイクスピアに会った印象を伝えています、役者、劇作家としての優秀さに劣らず、人ざわりもよい人間であると記しております。以後同時代人の記したものは大体こういった内容のものでありますが、ただシェイクスピアという人、あまり人との交際を好まなかった程度のごとは別にしましても、少くとも変り者などといった人物評はありません。いつのまにかロンドンへ出て来て、役者をして、先人たちの書き残した脚本稗史などの類を焼き直したり、同じような筋の脚本をひとまわり面白く書き直したりして、同じ役者仲間や観客の期待と要望にこたえて——ある時は彼らの能力を越えて——芝居を書き続け、まだ筆力が衰えたとも思われない1611年には、さっと筆を折って、かねて買ってあった故郷の邸に引退してしまい、悠悠自適して52歳でなくなっております。また、実生活の上でも相当の實際家であったようで、家作や土地（そのもっとも大きなものは1602年に43万平方メートルの土地を購入しております）、利権などをたくさん買いこんだ記録がありますのを見ても、経済的にもかなり裕福であったようであります。エリザベス一世時代のロンドン劇壇の経済状況がどのようであったかは、はっきりと把握することは難しいことではありますが、役者、劇作家としての収入、それに所属劇団の株主配当を合計しても、シェイクスピアがそれほど大資産の持主になれたというのは謎めいているといえます。一説には、上記2篇の浪漫的物語詩を献呈した Southampton 伯爵がシェイクスピアに好きなものを買うようにと1000ポンドという大金をあたえたこともあるそうであります。(E. K. Chambers: *William Shakespeare: A Study of Facts and Problems*, 1930, vol. ii, pp. 266-7)

シェイクスピアの年収の推定を低く見積って200ポンドくらいといたしますと、これはたいへんな金額であったわけです。また一方、中年以後のシェイクスピアはかなり物質的には恵まれていたと思われるのに、1604年彼のいわゆる四大悲劇の執筆中において Philip Rogers という薬剤師を相手に1ポンド15シリングの貸金取立てに関して訴訟をしていることなどから、その生活態度には他人にあてた好印象とはうらはらに、かなり打算的などいまいしょうか、しぶとい人生観の持主であったと思われる。ストラットフォード・オン・エイヴォンの町の教会に葬られ、その墓碑銘に「この墓を発くものに呪いあれ」と書かれている言葉には、人間性の真実を知り抜いたことからくる不気味な絶望感がうかがわれないでしょうか。

〔2〕

シェイクスピアは約20年のあいだに年平均二作品を書き続けていったということになります。おそらく、26歳ごろから書き出して、28歳ごろまでには、すでに同じ職業の朋輩作家の嫉妬をかうまでに自分の名声を上げていた、その異常な天才ぶりの躍進はたしかに不可解なほど早いといえます。シェイクスピア自身、たいへんな修業をしたにはちがいがありませんが、初期のシェイクスピアにいろいろと影響をあたえたと思われる、シェイクスピアと同年の生れで、おそらくは政治的な密命を帯びていたため酒の上の喧嘩で暗殺されたと考えられる Christopher Marlowe の死、その他先輩劇作家たちの相次ぐ筆力の衰え、いわば一種の交代期であったという好運な環境に恵まれたことも原因として考えられます。また一方では、当時のイギリスの言葉使いというものが十分きまっていなかった、言葉の意味がはっきりしていなかったことが挙げられます。別の言い方をすれば、シェイクスピアの頃には、大体ロンドンを含む中部および南部イングランドの地域の英語が自然に、歴史的に標準語になりかけていた時代であります。したがって、現在なら一語ですむところをいくつもの言葉を重ねないと何かを言い表わせないといった不安、むやみに花が咲き、葉が出ている花園に行き、そのなかから適当な花を摘んできて花束をつくるといった

ような苦心があったと言えます。このことは一方では、言葉が好きで、言葉を積極的に利用駆使する才能を持っていたシェイクスピアには幸運であったといえます。シェイクスピアの言葉好きは驚くべきもので、しゃれや地口といった言葉の遊戯もまた好きで、死にかかっている人物にもしゃれを言わせております。言葉が多いという理由には、国民に活力があるということもあげられます。エリザベス一世時代のイギリスには、まだ中世的世界観、人間観は依然として根強く生きていたことは事実であります。それと同時に旺盛な民族主義と初期資本主義の繁栄の過程にあって、国力の自覚が国民のあいだにみなぎっていたことも確かであります。とにかく、英語でものを書いた作家のうちで最も多くの語いを駆使したのがシェイクスピアであり、その語いは約25,000語といわれます。

シェイクスピアが28歳頃までには、すでに新進劇作家として不動の地位を確立していたことは、たしかに急激な成長の印象をまぬがれないのですが、それが必ずしもあり得ないことではないことがお分り頂けたことと思いますが、シェイクスピアの天才的発展の原因のひとつに、彼が生きていた時代が非常に早く過ぎて行くということがあったのではないかと思います。彼の作品の主題とか動機といったものは彼の伝記的事実と重ね合わせてみますと、彼が如何に時代の出来事とか、時代が帯びていた動乱の様相を敏感に受けとめ、その時代を超越すると同時に、時代の拍車を意識し、その意識が彼の才能の有機的発展を推進させたのではないかと思うのです。ただ、人間の主体的行動は特定の環境の中で行なわれるものであり、また、その環境はさまざまな要素の組み合わせであり、そこにはいろいろな力が働いているわけにありますから、時代の変化と作家の芸術の有機的発展とを類比的に並べて照応するからといって、時代の移り変わりが、その時代を生きたすべての作家の芸術を変えて行くことにはならないと思います。ただ、時代の流れ——歴史というものが秩序をたもちながらある方向に進んで行くエネルギーであり、それに参加する個性の世界であるとするならば、シェイクスピアの芸術的発展には、ただ単に作者の深化成熟ということだけでは説明のつかない、時代との関連において考察しないと説明のできな

いような複雑さがあると思います。

ところで、シェイクスピアが生きたイギリスルネサンス期は概括的にはエリザベス朝時代なのですが、この時代には英国の国威が宜揚され、奔放な人間解放精神が脈々として興っており、それまでは禁止されていた金貸金融業が認められるようになったりして、初期資本主義の担い手であるブルジョアジーが勢力をつけ始めて商業が盛んになり、富も非常に増えてくるといった国運の興隆期でありました。同時に、初期資本主義の内包する諸矛盾も社会の表面に次第に現われ、特にシェイクスピアの後半期、第17世紀の始まりと共に著しくなってきた時代でもあります。政治的にも、エリザベス一世を統一の中心として一応は絶対主義王朝の体制が安定を保っていた時代とみなされるのですが、実情は、中世初期の七つの王国の旗じるしを掲げた数多くの封建遺制の勢力をとどめた国々の集合体でありました。シェイクスピアの初期の歴史劇において、15世紀のイギリスの歴史にみられる血なまぐさい王たちの事件を材料にして、観客の大部分になじみある封建社会の斗争とイングランド内部の分裂をみせつけて、内乱による悲惨と災害をチューダー王朝を支持する立場から、人びとに警告しているのが、そのよい証拠であります。もっとも、シェイクスピアが歴史の材料をどのように演劇的に利用しているか、また、そのことが彼の劇作家としての発展にどのような照明を投げかけているか、ということがわたしたちにとって主たる関心事ではありますが。とにかく、政治体制はエリザベス女王が君臨した45年のすくなくとも前半の時代はその安定期といってよいのですが、国民を分裂させていたものに宗教の問題がありました。シェイクスピアの生れる以前の世代は英国宗教改革によって、カトリック教と新教とで大揺れに揺れた時代であり、その後遺症は社会のあちこちで随所にあられておりました。また、経済生活の面ではインフレがかなりひどかったようでもあります。1549年にエドワード六世の宮廷においてなされた Hugh Latimer の有名な説教のなかで (*Sermons of Hugh Latimer*, ed. G. E. Corrie, 1884, p. 101) Latimer は郷土 (yeoman) であった自分の父親のことを回想して、自己所有の土地はなかったが年に4、5ポンドの金を払っていくらかの土地を借り、それで一家

がかなり裕福な生活ができ、自分は学校で学び、姉妹にもいくばくかの結婚持参金をあたえることができ、まだ貧しい人々への施しが父親の手許には残ったというのです。ところが、Latimer 自身が同じ広さの土地を借りて、父親当時のすくなくとも四倍の借地料を支払って、子供たちに残すものは何ひとつなく、貧しい人に門口で一杯の酒をふるまうこともできないと言っております。エリザベス女王の治世になりまして1561年に貨幣の再鑄造が行なわれ、インフレーションの傾向はややおさまりましたが、止まるということはありませんでした。こうした物価の上昇原因はつきとめるのがなかなか困難ではありますが、イギリスの歴史学者 Joel Hurstfield はその原因の大きなものに、人口の急増をあげております。1530年代と1630年代との間にそれまで約2世紀のあいだ横ばい状態であった人口が2倍になったと指摘しているんであります。シェイクスピアが生れた頃の英国の人口は約300万人でありましたが、彼がなくなった1616年には約500万人に達していたのではないかと推定しております。第19世紀以降の人口増加に比較すれば、あまりたいした数字ではないかも知れませんが、当時のイギリスの経済状況からしますと、このチューダー王朝時代の人口の増え方は、やはりかなりなものであったと言えます。第16世紀半ばの英国経済はまだ未開発の状態、主要産物は羊毛ぐらいのもので、仕上げを施してない織布がその主たる輸出品といった程度で、人口の急激な増加に産業技術の進歩が追いつかなかったのです。したがって、英国中に不況の風が吹いていて、人びとの暮らしは楽ではなかったようであります。こうした政治、宗教、経済の不安な背景にあつて、もうひとつ重要なことに当時の思想の問題がありました。古代ギリシアのトレミーの天文学によって精緻に裏づけされた神中心の整然たる階層秩序を根幹とした中世の自然観、人間観が、第16世紀の末頃からルネサンスという新しい人間中心の世界観が解放精神として躍動しはじめ、この新旧二つの人間観がはげしくぶつかり合うという思想的な背景であります。エリザベス朝時代の人びとの夢は截然と区別され、精緻な裏づけのある、社会的に確立し安定している社会秩序でありました。神によって創造された自然は、神を頂点として下降的に位階的秩序を形成して存在し、天使、人間、獣類、植物、鉱物という五大

範疇がその中であって、そのそれぞれの範疇の内部にもまた、位階的秩序があるのであります。そして、それぞれがその割り当てられた位置を心得て、安んじてその位置をまもることが、均衡のとれた秩序ある社会と信じられており、それを破ることは混乱であるという信念が、ルネサンスの社会においてもまだ強く生きておりました。こうした時代の精神を巧みに要約しているアメリカのシェイクスピア学者 Hardin Craig の著書「魔法の鏡」(*The Enchanted Glass*, 1952 pp. 11-12) から引用してみます。

Broadly speaking, order (synonymously justice or natural law) was conceived of as the fundamental cohesive principle of the cosmological system, and similitude or correspondence as the means by which this principle was operative in the universe.

Order or justice is in the very nature of God. It is also in His nature to be all-powerful; He is the head and ruler of all the harmonious universe. Harmony means the proper functioning of every part in the place designed for it. The spheres of heaven are arranged in descending order from the uttermost empyrean to the earth in the centre of all. The elements have also their order: earth is the lowest, as it should be, for it is the heaviest; water is clearly above it, and air just as clearly above that; it follows that fire must be higher still. The principle of headship and of obedient subordination, evident in the workings of the universe, must of course be the pattern for human societies. It follows that monarchy is the best form of government and that all men must be contented with their stations in life, so that ambition becomes the most dangerous—and one of the most sinful—of all passions. It also follows that the father must be the supreme head of the family, with wife and children subordinate to him in obedience. A similar pattern must hold within man himself; souls or forms of souls are graded, the

lower participating with the natures of plants and animals, the highest, which must be dominant if order is to be maintained, with the natures of the angels or pure intelligences. Obviously, the angels themselves must be arranged in hierarchies. Thus correspondences, all exemplifications of the cohesive principle of orderliness (resting upon the two poles of authority and obedience), are permeative and innumerable, to be sought for in the fields of religion, natural science, ethics, politics, psychology—throughout the whole field of rationalization. The idea of correspondences is seized on and carried on in its own right as a principle of cohesion. Man becomes a microcosm, formed on the pattern of the macrocosm. The very heavens themselves—the signs of the zodiac and the planets—must be found in him, and, of course, for effective purposes; for nothing that the Creator provided is idle and without purpose.

「おおざっぱに言えば、秩序（正義あるいは自然法と同義）は宇宙大系の基本的統括原理として考えられ、そして、相似と照応とがこの原理が宇宙にあって働く媒介と考えられた。秩序あるいは正義は神の本性そのものなかにある。また全能であることも神の本性にある。神は調和ある全宇宙の頭首であり支配者でもある。調和とは各部分が割り当てられた位置において適切に機能をはたすことを意味する。天体球は究極の至高天から、すべての中心にある地球にいたるまで下降的秩序をなして配列されている。四大要素にも秩序がある。土はもっとも重いものだから当然、最低である。水は明らかに土よりも上であり、空気は同じく明らかに水の上である。火はさらに空気よりも上ということになる。宇宙の働らきの中に明らかな首長と恭順の原理は、もちろん、人間社会にとって範例とならねばならない。したがって、君主制が統治の最良の形態であるということになり、そして、すべての人間は人生における自分の位置に満足しなければならないことになり、かくして、野心はすべての熱情のうちでもっとも危険なもの——そしてもっとも罪深きもののひとつ——になる。おな

じょうに、父親は一家の最高の長であり、妻と子は彼に従順に従わなければならない。同様の型が人間個人のうちにも保たれなければならない。靈魂あるいは靈魂の形態には位置づけがなされ、低い位のは植物や動物の性質をわかち有し、秩序が維持されるためには支配的でなければならない最高位のは、天使あるいは純粹理知の性質をわかち有する。明らかに、天使そのものも位階制のなかに位置づけられなければならない。このように、さまざまな対応、すなわち（権威と服従という二つの極に立って）整然たる秩序の統括的原理のすべての例証が、あまねく行きわたり、数限りなく、宗教、自然科学、倫理学、政治学、心理学——理論的説明の全領域に求めることができる。対応の概念が統括の原理として正しく把握され運用される。人間は大宇宙の型にもとづいて形成された小宇宙となる。天界そのもの——黄道十二宮と惑星——も人間のなかに見い出されなくてはならない。しかも効果的な目的のためにであることはもちろんである。というのは創造主のあたえてくださったもので無用であり、なんらの目的を有しないものはないからである。」

シェイクスピアの作品中にも「ヘンリー五世」(*Henry V*) や「ジュリアス・シーザー」(*Julius Caesar*) など、そうした世界観を表明した引例がいくらでもできるけれども、そのもっとも有名なのは「トロイラスとクレシダ」(*Troilus and Cressida*) のなかでギリシアの將軍ユリシーズが述べる「位階」(Degree) の演説でありましょう。

Troy, yet upon his basis, had been down,
And the great Hector's sword had lack'd a master
But for these instances.
The specialty of rule hath been neglected:
And look, how many Grecian tents do stand
Hollow upon this plain, so many hollow factions.
When that the general is not like the hive
To whom the foragers shall all repair,

What honey is expected? Degree being vizarded,
The unworthiest shows as fairly in the mask.
The heavens themselves, the planets, and this centre
Observe degree, priority, and place,
Insisture, course, proportion, season, form,
Office, and custom, in all line of order :
And therefore is the glorious planet Sol
In noble eminence enthron'd and spher'd
Amidst the other ; whose med'cinable eye
Corrects the ill aspects of planets evil,
And posts, like the commandment of a king,
Sans check, to good and bad : but when the planets
In evil mixture to disorder wander,
What plagues, and what portents, what mutiny,
What raging of the sea, shaking of earth,
Commotion in the winds, frights, changes, horrors,
Divert and crack, rend and deracinate
The unity and married calm of states
Quite from their fixure ! O ! when degree is shak'd,
Which is the ladder to all high designs,
The enterprise is sick. How could communities,
Degrees in schools, and brotherhoods in cities,
Peaceful commerce from dividable shores,
The primogenitive and due of birth,
Prerogative of age, crowns, sceptres, laurels,
But by degree, stand in authentic place ?
Take but degree away, untune that string,
And, hark ! what discord follows ; each thing meets

In mere oppugnancy : the bounded waters
 Should lift their bosoms higher than the shores,
 And make a sop of all this solid globe :
 Strength should be lord of imbecility,
 And the rude son should strike his father dead :
 Force should be right ; or rather, right and wrong—
 Between whose endless jar justice resides—
 Should lose their names, and so should justice too.
 Then every thing includes itself power,
 Power into will, into appetite ;
 And appetite, a universal wolf,
 So doubly seconded with will and power,
 Must make perforce a universal prey,
 And last eat up himself. Great Agamemnon,
 This chaos, when degree is suffocate,
 Follows the choking.
 And this neglection of degree it is
 That by a pace goes backward, with a purpose
 It hath to climb. The general's disdain'd
 By him one step below, he by the next,
 That next by him beneath ; so every step,
 Exemplified by the first pace that is sick
 Of his superior, grows to an envious fever
 Of pale and bloodless emulation :
 And 'tis this fever that keeps Troy on foot,
 Not her own sinews. To end a tale of length,
 'Troy in our weakness lives, not in her strength.

—*Troilus and Cressida* 1. 3. 75~137.

トロイがいまなおその基礎に立って落ちず、
大ヘクターの剣がその主を失っていないのは、
つぎのような理由によるものです。
すなわち、統帥の主権が閑却せられているがためです。
ごらん下さい、この平野にかいなく立ち並ぶ
ギリシア軍の天幕、かいなき味方の数を。
総大将はさながら巢箱のごとく、
働蜂がすべてこれに帰一するのでなければ、
いかなる蜜をか期待できましよう。位階が蔽われますから、
仮面舞踏会では下賤も何も見分けがつかません。
およそ天球の各層さえも、そう、惑星も、宇宙の中心たるこの地球も、
すべて位階を、順位を、位置を、
規律を、軌道を、均衡を、時期を、形を、
つとめを、慣例を、あらゆる方向において守っております。
だからこそ、輝く惑星の太陽は、
他の惑星にまじってひとときわ高く、
玉座の天球に位置を占め、そのすべてをただす眼をもって、
わざわざいをもたらす星の凶相をただし、
あたかも国王の命令のごとく何の妨げも受けず、
善悪すべてに及ぶのであります。だがひとたび惑星が合して、
凶事をさし示し、秩序を失うに至れば、
あとに続くは、なんたる災禍、なんたる異変、なんたる反乱、
海は荒れ狂い、大地は揺れ、
風は吹きすさび、驚愕、変化、恐怖を生じて、
定まった位置にある万物の調和と安寧を、
乱し、引っくり返し、根もとからくつがえして、
まったくその安定を失わせてしまうのでありましよう。まことに、位階が乱れ
る時は、

人は分を守って初めて高みに達する階梯がゆらぎ、
すべての企てが病んでいることとなります！ 社会も、
学校の席次も、都市の組合も、
遠隔の地よりの平和な交易も、
長子権も、生得権も、
長上の、王冠の、王笏の、月桂冠の特権も、
位階によらなければ、どうして正しい位置を保ち得ましょう。
位階を排し、その一絃の調子でも狂わせるならば、
何という不協和音を発することでありましょう。万物相会するも
ただ背反あるのみです。境を限られた海水は、
その胸を岸边よりも高くあげ、
このかたい大地を一面水浸しにいたします。
強者は弱者をごう然としてあごで使い、
無道の息子は父親を打ち殺します。
暴力は正義となります。あるいはむしろ、正邪そのものが、
その両者の果しない軋轢の間に正義はところを得ているものでありますが、
その名を失い、かくして正義もまた同じ途をたどることになります。
かくして、すべては暴力に、
暴力は意志に、意志は貪慾に帰してしまい、
万人の心にすむ狼である貪慾は、
かくて意志と暴力との二重の助けを得て、
かならずや万物を餌食とせずにはおかず
ついにはみずからも食いつくすであります。アガメムノン陛下、
このような混沌が、位階が窒息する時、
その窒息についてあらわれてきます。
そして、この位階が閑却されれば、
一歩登らんとしながら一歩退くことにもなります。
すなわち総大将は次の位の者に、

次の位の者はその下の位の者に、その下の位の者はさらにその下の位の者に軽んじられ、かくして各階級の者は、目上の者を妬む最初の一步を手本と見習い、ついには嫉妬の熱病にとりつかれて、陰険蒼白な戦いをはじめます。

トロイをいまに立たせているのは実にこの熱病であり、断じてトロイ自身の力ではありません。以上長広舌を要するに、トロイの倒れないのはわれらが弱いのであり、かれが強いからではありません。

これは、自然の秩序とその内部における対応の観念をもっとも明らかに述べた有名な言葉であります。このような引例が多くできるのは、一方では社会的階層秩序を打ち崩そうとするルネサンスの新しい人間観が脈々として興り、社会的流動が随所に表面化してきたことを示すものではないでしょうか。実際は理論よりもはるかに柔軟性に富んでいたと言えます。表面はまだ強い中世的世界観が存在していたとしても、その底流にはすでに、この世界観への懐疑と挑戦とが絶えず横たわっていたと言えます。社会的身分の移動と同時に、人びとの地理的移動も激しかったようであります。ロンドンへはさまざまな人間や才能が絶えず流入していて、イギリス初期資本主義が非常に発展して伸びて行くなかで、シェイクスピアはその才能と腕を發揮するすばらしい機会に恵まれたといえます。当時のロンドンには華やかな演劇界を發展させる富、人間、力と時間の余裕があったのです。しかし、第16世紀も90年代後半、それも終り頃になって来ますと、初期資本主義のいろいろな矛盾が現われてきて、それがインフレという一般社会の経済状態から、やがては政治の面へ暗い影をおとすことになって来ます。輝やかなしいエリザベス王朝の栄光にかげりが見えて来るのであります。

〔 3 〕

エリザベス王朝というのは、社会科学の用語では絶対主義王朝でありまして、中世末期から近世初頭にかけて、封建主義から資本主義への過渡期に存在した専制主義的国家形態であります。そして、絶対主義というのは、封建制が新興ブルジョワジーに倒されたところに出て来た君主が、滅び行く封建遺制勢力と新興ブルジョワジーの力と、その両方の均衡の上に乗っかって、両方の利益を代表しながら、うまくあやつって一つの国家形態をつくって行くということになります。エリザベス一世（1558-1603在位）はたいへんすぐれた君主で、この女王の時代にはイギリスは海上でスペインと戦ってこれを破り、制海権を握って物質的繁栄を築き、国力を増し海外に発展した時代でありましたが、国の飛躍的興隆は波瀾の多い国外政治情勢を内包するものでありましてし、国内政治においても、決して平穩無事な時代ではありませんでした。宗教改革以後の新体制はできあがっていたものの、国内情勢はまことに不安定で、カトリック教徒の旧にもどそうとする策動はかなり執拗でありましてし、1601年には有名なエセックスの伯爵 Robert Devereux（1556-1601）がエリザベス女王の退位を要求して反乱を起し処刑され、先に述べたシェイクスピアの有力なパトロンであった Southampton 伯爵も一味に連座して終身刑に処せられるという大逆事件が起りました。シェイクスピアの晩年になりますと、エリザベス一世時代の栄光は色あせて、懐疑主義が表面にあらわれてまいります。エリザベス一世の死後八年に、John Donne（1561-1631）という詩人が書いております。（‘An Anatomy of the World’ in *Collected Poems*, Nonesuch ed., p. 202）

And new Philosophy calls all in doubt,
 The Element of fire is quite put out,
 The Sun is lost, and th' earth, and no man's wit,
 Can well direct him where to look for it ...
 'Tis all in pieces, all coherence gone.

そして新しい哲学（人生観）はすべてに疑いを抱き、
火の要素はあとかたなく消え去り、
太陽も大地も失われて、人間の知恵では
どこを探してよいかつかめず…
すべてはこなごなで、統括はすべて去ってしまった。

シェイクスピアがああ37篇の戯曲を書いた時期は、より広くヨーロッパ文化的に言えば、ルネサンス期であり、事実エリザベス一世45年間の時代はイギリス・ルネサンスのめざましい開花期でありました。ところで、ルネサンスというと、わたしたちはまず常識的には非常に輝やかしく、華やかな時代というものを想像いたします。封建遺制が克服され人間が解放され、初期資本主義がまだ無限の可能性をはらんでいると思えた時代で、富もたいへんふえて、生活もぜいたくになった時代というように考えます。「ロミオとジュリエット」(*Romeo and Juliet*)の話などもルネサンスらしい話だというふうに思うのでありますが、エリザベス朝も後期になりますと、政治的にも社会的にもきびしい現実が急速に社会の表面に現れて来て、それまでのように将来に対する明るい予測、さらには、明るくも暗くも予測というものを時代に対して持ち得なくなって来た——ルネサンスの憂鬱が時代の上に深くたれこめてきたということが考えられます。

In sooth, I know not why I am so sad :
It wearies me ; you say it wearies you ;
But how I caught it, found it, or came by it,
What stuff 'tis made of, whereof it is born,
I am to learn ;
And such a want-wit sadness makes of me,
That I have much ado to know myself.

——*The Merchant of Venice* 1. 1. 1~7.

実際、なぜこんなに憂鬱なのかわからない。

そのことでくたびれてしまっている。君もくたびれているじゃないか。

しかし、どうして憂鬱に取りつかれたのか、捨てたのか、手に入れたのか、
どういうものから出来ているのか、どこから生れて来たのか、

ぼくにはわからない。

憂鬱がぼくを、自分で自分を知るに苦しむほど、

愚かな人間にしているんだ。

この第一場はヴェニスですが、第二場のベルモントでもポーシャは最初のせりふで、

By my troth, Nerissa, my little body is aweary of this great world.

ほんとうに、ネリッサ、わたしの小さな身体は、この大きな世の中にあきてしまっている。

と言っております。ルネサンスの憂鬱が、ヴェニスとベルモント両方の場所にあられて、しかも最初の言葉が、両方の土地で退屈し、世の中に厭きてしまっているというせりふになっております。また、わたしたちが底抜けに明るい喜劇のように思っている「夏の夜の夢」(*A Midsummer Night's Dream*)にも、1596年、3年にわたる冷夏による飢饉でオクスフォードにおきた農民一揆のエコーをひびかせるようにタイティニアのせりふは語っております。

The ox hath therefore stretch'd his yoke in vain, and the ploughman sowed his seed in vain;

The ploughman lost his sweat, and the green corn hath rotted ere his youth attain'd a beard;

Hath rotted ere his youth attain'd a beard: the fallow lies unbrut, and the bare fallow brings the teeming mare

The fold stands empty in the drowned field, and the cold barren fallow brings the teeming mare

And crows are fattened with the murrion flock; the murrion flock, which makes the swain his flock,

The nine men's morris is fill'd up with mud,
And the quaint mazes in the wanton green
For lack of tread are undistinguishable :
The human mortals want their winter here :
No night is now with hymn or carol blest :
Therefore the moon, the governess of floods,
Pale in her anger, washes all the air,
That rheumatic diseases do abound :
And thorough this distemperature we see
The seasons alter : hoary-headed frosts
Fall in the fresh lap of the crimson rose,
And an old Hiems' thin and icy crown
An odorous chaplet of sweet summer buds
Is, as in mockery, set. The spring, the summer,
The chiding autumn, angry winter, change
Their wonted liveries, and the mazed world,
By their increase, now knows not which is which.

—2. 1. 93~114.

だから牡牛がくび轆を曳きずったのも無駄になり、
農夫も汗のかき損、青い麦も
ひげが出来るほど成長せずに腐ってしまい、
羊のおりは水づかりの野原にからのまま、
疫病でたおれた羊は鳥の腹を肥やす。
九人駒の遊び場は泥で埋まり、
うねりくねった迷路は草ぼうぼうで、
踏む人がいないので見わけがつかず、
人間どもは冬の楽しみを奪われ、

今じゃ讚美歌や祝の歌でにぎわう晩は一度もない。
だから潮の干満を支配する月が
真青に怒って、空全体を湿らすので、
何処にも風邪が大はやり。
こうした天候の狂いから、今年も
四季がてん倒して、白髪頭の霜が
咲いたばかりの真赤なばらのふところへ落ちこみ、
冬のじいさんの冷たいはげ頭の上に
ふくいくとした五月の花の冠が
人を馬鹿にしたようにのっけられる。
春と夏の実りの秋とけわしい冬とが、
それぞれ平生と変った服装をし、あきれた世人は
その時々産物では、どれがどれやら見わけができない。

「十二夜」(*Twelfth Night*)は華やかな楽しいロマンスと、ジョンソンのヒューマナーの性格をもった辛辣なリアリズムとの有機的な融合、均衡のとれた構成、すぐれた性格描写、美しい詩と散文など、シェイクスピアの喜劇的技巧の最高を示すものでありますが、この作品を最後に彼が本格的な喜劇を書くことをやめたことを、注目しなければなりません。この喜劇は1601年の十二夜、すなわち1月6日の救世主顕現(Epiphany)の祝日にホワイトホールの王宮で初演されたものであろうという、かなり有力な推定がなされておりますので、1600年の終り頃書かれたものと思われまゝです。この芝居の最後の幕切れで道化のフェステが舞台にひとり残りまして小曲を歌います。五節から出来ている歌がありますが、その各節に繰り返される文句が、

For the rain it raineth every day.

雨といやあ、毎日雨降りさ。

というのですが、喜劇の終りにしては気になる歌の文句であります。不安と幻滅の暗影を感じさせる言葉であります。この「十二夜」以後の喜劇作品は、喜

劇といっても全体の雰囲気はずっと暗いものになっております。

[4]

英国ルネサンス期でもことにシェイクスピアの生きていた時代はイギリスの歴史でいえばひとつの転形期であったと言えます。転形期であったがゆえに、動乱の様相を時代が帯びていたとも言えます。とくに新しい世紀の始まりとともに政治の面ではエセックス伯の叛乱と処刑、フランシス・ベイコン (Francis Bacon 1561-1626) の顛落と老残、あるいはシェイクスピアが先輩として劇作術を学んだマーローのおそらくは政治的理由による暗殺などの事件に象徴される人間の運命の変転と浮き沈み、インフレと不況とが吹き荒れる経済状態、さらには、当時の正統的、基本的世界観への根底的な反問や挑戦といった人間観の激しい揺れ動きなど、現実問題としてはまことに生きにくい時代であったと思われまます。そういう時代をシェイクスピアという人は実に巧みに生き抜いたと言えるのですが、その生涯のなかで、劇作の期間は大体約20年間でありますが、そのちょうどまん中あたりの1599年に「ジュリアス・シーザー」が初演されております。そしてこれ以後、いわば暗いひろがりを持った、それまでの作品とは異質の内容を持つ悲劇作品の時代が始まるのですが、それまでの10年間、シェイクスピアは常に新しい面の開拓に心を注ぎ、歴史劇を手がけ、喜劇を書き、悲劇を試みるといった具合に、いろいろな人生の価値を試してきて、その作品はエリザベス朝演劇の主流をなすにまで至りました。そうして、それまでのシェイクスピアは自分の生きている時代をあまり意識しなかった、というよりは意識しなくてもよかったのではないかと思われまます。しかし第17世紀の訪れとともに、彼は自分の生きている時代というもの、あるいは歴史というものをはじめて強く意識するようになったのではないかと思われまます。もちろん、それまでシェイクスピアが時代の変転に無感覚であったと言うのではないことは先にも述べた通りでありますが、やはり、四大悲劇が書かれた以前のシェイクスピアの人間把握とその描写を、以後のそれとを較べてみますと、単に作家の成熟とか、描写の完成度の高さだけでは説明のつかない、作品全体をお

おう暗い影は時代との関連で考えないと理解できない複雑さがあるように思われます。そして、そのときほど、シェイクスピアの天才の展開相、シェイクスピア自身の芸術的な人間像をはっきりとわたしたちが見い出すことのできる時は、ほかにはないと思うのです。

参考書目

本文中に引用した文献のほかに、本稿を書くにあたって次の諸文献を参考にさせていただきました。あわせて感謝の意を表します。

富原芳彰『続・シェイクスピア試論』1968 研究社

『シェイクスピアを考える』1973 大修館

木下順二『シェイクスピアの世界』1975 岩波書店

James Sutherland & Joel Hurstfield(ed.): *Shakespeare's World*, Edward Arnold Ltd., London, 1964

Gāmini Salgādo: *Eyewitnesses of Shakespeare*, Sussex U. P., 1975

Marchette Chute: *Shakespeare of London*, Souvenir Press Ltd., London, 1977